

## 2022年度国際版画美術館事業報告書【展覧会版】

展覧会名	文明開化の子どもたち Les enfants de l'ère Meiji – A l'école de la modernité (1868-1912)		担当者名	村瀬可奈	
会期	2022年3月30日(水)～5月21日(土)		開催日数	40日	
会場	独立行政法人国際交流基金パリ日本文化会館				
主催	町田市立国際版画美術館、独立行政法人国際交流基金パリ日本文化会館				
企画構成	町田市立国際版画美術館				
協賛・後援・協力	特別協力: 公文教育研究会 協賛: 日本航空株式会社				
巡回館	なし				
展覧会概要	19世紀後半の明治時代は、西洋の文化・風俗との出会いにより日本の社会が大きく変わった時期にあたる。街には洋風建築や洋装が普及し、徐々に近代化が進められた。子どもの生活も例外ではなく、西洋式の学校教育が導入されるなど、今日へと繋がる新たな「学び」のかたちが模索される。一方でまだ裏通りには江戸の香りが残っていた時代。昔ながらの「遊び」の世界も、彼らの生活を鮮やかに彩り続けた。本展では、新旧の共存する19世紀後半の子どもの「学び」と「遊び」を、色彩豊かな浮世絵を通して紹介した。				
ねらい・対象	浮世絵には風景画や美人画といった鑑賞性の高い作品のほか、本展で紹介するような「教材」や「おもちゃ」など実用性に富んだ作品も多数制作された。今日紹介される機会の少ない分野ではあるが、当時の子どもの日常やその成長を見守る大人たちのまなざしを今に生き生きと伝える貴重な資料である。本展は、2017-18年に当館と足利市立美術館で開催された「浮世絵にみる子どもたちの文明開化」展の内容を、フランスの鑑賞者に向け再構成したものである。未来への希望をのせた教育錦絵や、夢を育むおもちゃ絵や物語絵など、144点を展覧し、明治期の好奇心を感じていただく展示を目指した。				
関連催事	催事名	開催日	タイトル	講師等	参加者数
	講演会	3月29日(火)	オープニング記念講演会 「文明開化の子どもたち」	村瀬可奈(当館学芸員)、マヌエラ・モスカ ティエッロ(チェルヌスキ美術館学芸員)	108人
観覧料	一般	割引	無料日		
	5 €	3 €	5月14日(土) 欧州美術館の夜(Nuit européenne des musées)		
観覧者数	6,784	人			
主な収入	観覧料収入		図録販売収入	受託販売収入	その他の特定財源
	- 千円		- 千円	- 千円	- 千円
事業経費 (当館負担分)	・旅費(国内移動費)			7千円	7 千円
主な広報・取材 等の講評	◆フランス【テレビ】Aligre fm (2022/05/04)、TV5 MONDE (2022/05/13)【新聞】Le Monde (2022/4/19)、La Croix (2022/5/4)【雑誌】Le Figaro Magazine (2022/5/6号)、Beaux Arts Magazine (2022年5月号)、L'objet d'Art (2022/5号)【ウェブ】Histoire.fr (2022/3/30)、Tererama.fr (2022/4/22)、Lejournaldesarts.fr (2022/11/5)ほか ◆日本【新聞】町田ジャーナル【雑誌】月刊コロムブス(2022/5号)【ウェブ】スフスマート(2022/4/2)ほか				
アンケート結果	回収数	回収率	満足度 (とても満足と満足の率)		
	371 件	5.5 %	98 %		
アンケート結果	主なご意見 ・とても興味深い展示で、今までパリで行われた展覧会とは異なるテーマだった。 ・各作品の下にある沢山の解説がとても良かった。 ・浮世絵の繊細さと、浮世絵が放つ生き生きとした印象に魅了されました。明治時代とそれぞれの文化の混合が、展示作品によって見事に紹介されていました。 ・とてもよかったが、作品の中で紹介されている楽器やオブジェもみられたらもっとよかった。				

工夫と反省点、改善方法	企画立案	2021年2月にパリ日本文化会館より展覧会開催の依頼があり、庁内での検討の結果、3月に共催にて開催することが正式に決定した。4月に企画内容の第一稿をパリへ送付し、相談の末5月中旬に枠組みが確定した。8月に開催についての合意書を取り交わした。
	展示構成・作品選定	当館と足利市立美術館で2017-18年に開催された「浮世絵にみる子どもたちの文明開化」展をベースにしなが、パリの鑑賞者へ向けて構成と作品を大幅に入れ替えた。冒頭には横浜絵や開化絵を通して明治初期の風景・風俗を紹介するプロローグを設け、終盤にフランス人画家ビゴの描いた日本を展示するエピローグを加えた。パリ日本文化会館の助言を得ながら、全144点を選定した(48点は新規出品)。当館収蔵品88点のほか、56点を公文教育研究会より拝借した。章立ては、プロローグ 明治・日本へようこそ！／1. 浮世絵で“学ぶ”(学校のはじまり／英語ブーム／森羅万象を学ぶ)／2. 浮世絵で“遊ぶ”(おもちゃ絵で遊ぼう！／子どもたちの好きなもの 動物・おぼけ・物語)／3. 子どもたちへのまなざし(楊洲周延／尾形月耕／宮川春汀／山本昇雲)／エピローグ ビゴのみた日本。
	図録	パリ日本文化会館編集発行により展覧会図録が制作・販売された(22cm x 28cm、全192頁、28€)。論文2点、図版、作品解説、年表、作品リストを収録。テキストは中城正堯氏(日本展監修者)、福島直氏(足利市立美術館、現東京オペラシティアートギャラリー学芸員)、担当学芸員が日本展図録に執筆したものに、新規出品作の解説を書き加えて2021年9月頃に提出。フランス語に翻訳されたのち、12月頃からレイアウト確認、校正を行った。2月に色校正を行ったが、ロシア・ウクライナ情勢の影響により校正紙の返送が叶わず、PDFでのやり取りとなった。
	空間構成	2021年9月頃にデザイナーによる初案が提示された。空間のコンセプトは、子ども時代のノスタルジーを想起させるもの、そして新たな時代(文明開化)を照らすものとして、「ランタン(灯籠)」をテーマとしたもの。各空間の天井からは回り灯籠を模した筒状のスクリーンを吊り下げて作品の画像が投影され、平面作品が多いことを感じさせない立体的な空間構成となっていた。会期直前まで展示ケースのサイズや版本の展示方法、壁面の色、解説パネルのデザインなど、細かい調整が行われた。ちなみに壁面や展示ケースは深い紺色や淡いグリーン、イエローなど、展示作品に使われている色彩が基調色に用いられ、現地を確認したところ全体的に作品がよく映えるデザイン性に富んだ空間となっていた。またキャプションについては、現地担当者からなるべく詳しい解説が好まれるとの助言があり、日本展とほぼ変わらぬ分量の解説が全点につけられ、アンケートでも好評だった。
	クーリエ・輸送	2022年2月初旬に公文教育研究会より作品を拝借し、当館の作品と合わせて額装、梱包など出発準備を行った。年明けからコロナウイルスの感染が拡大し、クーリエの渡航可否が懸念されたが、2月下旬にはピークアウトしたため随行が決まった。しかし渡航直前にロシア・ウクライナ情勢の影響によりパリ直行便がキャンセルとなった。関係各所との調整の末、3月16日の時点でロンドン経由での輸送ルートが確保でき、19日に作品が貨物便で渡航、20日にクーリエが渡航することとなった。現地ロンドンではパリ日本文化会館の担当者が作品を受け取り、21日にクーリエ同乗によりパリへ陸送した。会期終了後には、直行便の運行が再開されたため、当初予定されていた通りに作品が帰国した。作品は合計10箱のクレートにて輸送された。
	展示撤去	上記のとおり輸送スケジュールの変動に伴い、展示の計画も変更を余儀なくされた。当初は3月21日から作品設営が予定されていたが、同日が作品搬入日となり、22日にシーズニング、23日に展示が開始された。そのため、別日に予定されていたグラフィックおよび照明調整を限られた日程で進行することとなった。作業にあたってはパリ日本文化会館の職員の通訳を介して進められた。今後もこうしたイレギュラーな対応が生じる可能性を考慮し、余裕のあるスケジュールリングや作業工程の事前確認をこころがけたい。
	広報	現地での広報は、プレスリリースやプレスキット(解説、図版をまとめた18頁におよぶ冊子)の作成、ポスター掲示、季刊プロシユアへの掲載、招待状、広報用ポストカードの作成など充実したものだ。広報文は当館より提出した展覧会概要や図録原稿をもとに、現地で翻訳のうえ編集された。会期前日(3月29日)には内覧会(プレス向け、一般招待向け)が開催された。一連の広報活動は広報会社へ委託されており、最終的なメディア露出は、新聞雑誌54件、テレビ・ラジオ4件、WEB69件にのぼった。またパリ日本文化会館の教育普及活動として、公式YouTubeの動画シリーズ「Le Studio」が製作され、インタビュー形式で担当学芸員が解説する動画が公開された。このほか、当館独自のプレスリリースを国内の美術メディアへ発送したほか、町田市のシティプロモーションとしてのプレスリリースも発信した。
	内覧会・イベント	3月29日に内覧会が実施され、170名が来館した。1980年代から2000年まで文化大臣・国民大臣を複数回務めたジャック・ラング氏が来場し、鑑賞。大変情熱的かつ新しいテーマを扱った展覧会で素晴らしいとのコメントがあった。同日に記念講演会が開催され、事前申込の時点で満席となった。1時間半のなかで、担当学芸員の講演、テルヌスキ美術館日本美術担当学芸員のマヌエラ・モスカティエツコ氏との対談、会場との質疑応答も実施された。また会期中は小学生の団体鑑賞が複数回実施され、日本とフランスの文化を比較しながら、浮世絵の鮮やかな色彩を楽しむ子どもたちの姿がみられた。
その他特記事項	事業経費の欄には、当館が負担した国内移動費のみを記載した。	